

二松学舍大学人文学会 第一二四回大会 要旨集

二松学舎大学人文学会第 124 回大会

■日 時 2022 年 7 月 9 日（土）12:50～（開場 12:30）

■開催方式 対面＋オンライン（Webex）
※講演へのオンライン参加については、会員限定といたします。

■会 場 二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 2 階 201 教室、202 教室

■タイムスケジュール

12:50 開会挨拶

13:00～15:10 研究発表（各 30 分（発表 20 分、質疑応答 10 分））

【第 1 会場】201 教室

程顥の「性」論 ―仏教とのかかわりを導きとして―

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期課程 1 年 大森 幹太

裴駰と呉越史 ―范蠡への注釈を視座として―

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士前期課程 1 年 三木 啓介

春秋三伝における災異観

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期課程 3 年 陳 鵬飛

近代における小説観 ――日中両国の小説認識の形成――

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期 3 年 石 高原

【第 2 会場】202 教室

中上健次の幼少期体験と「路地」～中上健次『一番はじめの出来事』論～

教員・講師人材派遣株式会社コスモ・学習塾トライプラス浅草校 富田栄一郎

井上哲次郎講述「支那哲学史」に見る明治期中国哲学研究の一端

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期課程 2 年 鈴置 拓也

「是」存在文の本質と文の成立条件について

北京大学中国語文学系漢語言文字学専攻博士後期課程 喜島 千晴

留学中の末松謙澄の活動に見られる近代的な漢学へのアプローチ

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期課程 3 年 胡 加貝

15:30～16:20 講 演

論文とエッセイのあいだを綴る

二松学舎大学文学部准教授 荒井 裕樹

16:25 総 会

16:40 閉会挨拶

程顥の「性」論―仏教とのかかわりを導きとして―

二松学舎大学文学研究科中国学専攻 博士後期課程1年 大森 幹太

朱子学の祖とされる南宋の朱熹（一一三〇―一二〇〇）は、北宋中期から南宋にかけて論議される種々の問題について、程顥（一〇三二―一〇八五）・程頤（一〇三三―一一〇七）の二程を中心とした北宋道学の説を集成することで、自身の思想を確立した。

従来、その二程の思想研究における基礎資料として用いられてきた『河南程氏遺書』及び『河南程氏外書』は、熙寧一〇年以降（一〇七七―）の二程の語録資料である。そこには、「理」や「天理」、「生生」の論など、多様な方向性をもつ思想議論や論評が収められる。それでは、この語録資料で語られる二程思想の大枠は、いかなる時期に、いかなる基盤のうえに形成されていたのであろうか。本発表では、その解明の一端として、二程の、特に程顥の「性」論について、彼の青壮年期における思想動向を視野に入れつつ検討を試みる。具体的には、後に仏教に対抗する立場をとる程顥自身がかつては仏教や老荘に惹かれていたという資料があることにまず注目する。そのうえで、熙寧一〇年以降の語録資料に見られる、程顥の仏教に対する論評部分を手掛かりに、程顥思想における仏教の位置づけと、そこに見られる彼の「性」論の特質を追究したい。

裴駰と呉越史―范蠡への注釈を視座として―

二松学舎大学文学研究科中国学専攻 博士前期課程1年 三木 啓介

春秋時代の越の范蠡は古くより人々の注目を集めてきた人物であり、『国語』や『史記』には越王句踐の参謀としての活躍や、利殖家としての成功が記されている。その後も范蠡像は変遷を続けたが、なかでも後漢期に成立したとされる『呉越春秋』と『越絶書』は、先行する史料とは異なる内容を載せる。両書については専論があるものの、受容を視点とした研究は少ない。そこで本発表では南朝宋の裴駰『史記集解』（以下『集解』）における范蠡の記事に対する注釈を手掛かりに、『呉越春秋』と『越絶書』の受容を検討したい。

『呉越春秋』と『越絶書』は魏晋期よりその名を明示して引用されるようになり、正史への注釈では裴駰にやや先行する徐広『史記音義』、裴松之『三国志』注で用いられ始めた。裴駰も両書を注釈に用いたが、范蠡の記事に対する注釈では引用していない。唐代の『史記』注釈者のように両書を利用しえたにもかかわらず、である。こうした裴駰の引書の態度にはいかなる意図があったのか。

かかる疑問をもとに、本発表は裴駰の引用の有無に、対象のいかなる違いがあるのかを考察する。『集解』での両書の位置づけに注目することで、范蠡の記事への注釈に引かれなかった理由を探りたい。

春秋三伝における災異観

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期課程3年 陳 鵬飛

中国では古来、天と人とは関連があると考えられ、自然災害、あるいは異常現象の発生の原因を人事に求めた。このような災異観はすでに春秋時代に存在していたが、雑然として体系化されていなかった。

本発表では、『左氏伝』・『公羊伝』・『穀梁伝』（合わせて「春秋三伝」と呼ばれる）を対象として、三伝に記述されている災異に関わる記事と論説を整理・分析することで、災異の類型と特徴を通じて、三伝では「災」・「異」と人事（国政）との結びつきが強いことを明らかにしたい。

『春秋』経文には、「異」という記述が見られないが、「災」として記録された出来事が十一例あり、すべて「火災」を指している。しかし、春秋三伝の伝文には、「災」・「異」の事例と種類が豊富になり、火災のほか、虫害・氣象災害・天文異象が記され、さらに戦争に関する記載も見られる。『左氏伝』には、災異記事が数多く記載され、自戒と予言によって、天意と人事との因果関係を表し、礼法と徳政を主張する。『公羊伝』と『穀梁伝』には、災異記事を天と人との関連から説く例が少ないが、天人関連の災異思想は読み取ることができる。

近代における小説観——日中両国の小説認識の形成——

二松学舎大学文学研究科中国学専攻博士後期3年 石 高原

日中両国における近代小説観の成立は明治Ⅱ清末の頃であると考えられる。西洋の文学概念が導入されたことに伴い、小説が文学として重視されるようになった。では、漢文学の伝統を共用している両国において、中国伝統小説に対する認識はどのように変遷していくのか。本発表では、清末Ⅱ明治初期という過渡期において、伝統小説に対する認識の変化を通じて、小説観の変遷過程を考察する。

清末において、梁啓超は日本を通じて先進的な小説観念を導入し、小説を「文学の最も上乘（最上位）」という位置に上げた。この時点では、政治小説が強調された一方で、中国伝統小説は否定の対象とされた。しかし、この認識はまもなく民族主義を代表とする風潮に圧倒され、中国伝統小説の価値が再発見されるようになった。

一方、明治期の日本において、西周の『百学連環』から坪内逍遙の『小説神髓』に至ると、近代観念の導入によって小説観が変化する。つまり、西洋の文学観念によって中国伝統小説の紹介や評論がなされ、また中国小説史などの体系的な研究が始まり、伝統小説の文学的価値が発見された。

このように、日本も中国も共に近代になって、伝統的な小説観が近代的文学概念に転換される過程があった

中上健次の幼少期体験と「路地」 〈中上健次『一番はじめの出来事』論〉

株式会社コスモ、学習塾トライプラス浅草校 富田 陽一郎

中上健次『一番はじめの出来事』について考察する。評伝、事典、作品前後の創作、批評、先行研究等を参照する。この作品に描かれるのは、中上健次自身とも重なる、少年たちの「路地」での少年時代の出来事である。今回のテーマは、中上健次が幼少期に体験した「路地」を、歴史的に存在した被差別部落研究と、現代の被差別部落の現状把握との両面から、推察していく試みである。歴史的な被差別部落研究は、『被差別部落一千年史』高橋貞樹、『被差別部落とは何か』喜田貞吉などからまず把握してみる事とし、また、現代の被差別部落の現状は上原善広の著作にあたってみるつもりである。被差別部落の古層と現代層を把握する事により、その中間にあたる中層の時期にあった、中上健次の幼少期体験の舞台であった、1946年（昭和21年）から1969年（昭和44年）までの、0歳から23歳までの時代の熊野の被差別部落の状況を推察することが、大きな目標となる。この試みにより、小説『一番はじめの出来事』における、少年の死生観や性の芽生え、友人関係、と同時に、3月3日の水平社の日に自殺した兄の事、様々な「差別」をめぐる言説の謎なども、解けてくるのではないかと考えている。

井上哲次郎講述「支那哲学史」に見る明治期中国哲学研究の一端

二松学舎大学文学研究科中国学専攻 博士後期課程2年 鈴置 拓也

井上哲次郎は明治から昭和にかけて東京大学哲学学科教授として活躍した人物であるが、彼は大学卒業後すぐに「東洋哲学史」の編纂に従事しており、その編纂過程は彼の講義録から伺うことができる。

彼の「東洋哲学史」研究は主に、西洋哲学の概念をもって東洋哲学を捉えようとするものであったといわれる。このような方法による中国哲学やインド哲学などを含む東洋哲学研究は、同時期に東京大学において清朝考証学に基づいて講義をしていた島田重礼とは異なり、主に哲学科出身者により継承された。

本発表で取り扱う「支那哲学史」四冊（二松学舎大学附属図書館三島文庫蔵）は東京大学において明治二十四年から二十五年にかけて井上哲次郎によって講義された記録である。

この講義録からは、従来論じられてきたような西洋哲学に基づく方法のみにとどまらず、江戸期までの注釈書による研究方法から脱皮しようとする姿勢や、資料的に限られた状況の中で体系的に中国哲学を論じようとする試みを読み取ることができる。

今回はこの講義録に引用される書物、さらには井上文庫本の書入などを通して井上哲次郎の中国哲学史の構想を考察する。

「是」存在文の本質と文の成立条件について

北京大学中国語言文学系漢語言文字学専攻 博士後期課程 喜島 千晴

中国語には存在表現を担う基本的な文として、「有」を述語動詞とし、存在対象を目的語に置く構文があるが、このほかにも「山坡上全是栗子树」「村子前面是一片水田」のように「是」を述語動詞とし、存在対象を目的語に置いて表す存在文がある。これを本発表では「是」存在文と呼ぶ。「是」存在文は形式、意味ともに「有」存在文と似ているが、文の成立条件に違いがある。例えば、「桌子上有一本书」を単純に「*桌子上是一本书」と言い換えることはできず、「图书馆前面是孤零零的一辆汽车」を「*图书馆前面有孤零零的一辆汽车」と言うことはできない。「是」存在文にどのような成立条件があるかについては、すでに多くの研究で明らかにされているが、なぜこのような制約があるのか、という点に関しては、先行研究が少なく、現在も定説となる有力な意見が見られない。そこで本発表では、「是」存在文の本質は事物の存在を表す文ではなく、「存在物を用いて場所や空間を説明する文」であり、「是」存在文の成立条件がすべてこの本質に起因することを論じる。

留学中の末松謙澄の活動に見られる近代的な漢学へのアプローチ

二松学舎大学文学研究科中国学専攻 博士後期課程3年胡 加貝

研究発表明治二十一年に、末松謙澄は文部省より日本最初の文学博士の学位を授与された。末松謙澄以外に博士を授けられた人は、いずれも東京大学で学問を講じ、それぞれ明治・大正ないし昭和時代の学術界で活躍したが、末松謙澄だけは新聞記者を経て政界に入り、常に官僚として認識されている。だが、そもそも彼はどのような活動によって博士学位を授けられたのであろうか。伝記的事実に照らせば、明治十一年から明治十九年までの英国留学に関わると考えられる。末松のイギリス留学中の業績として知られているのは、英訳『源氏物語』や『演劇改良意見』などの著作であるが、これらが学位の対象となったとは考えられない。それ以外に先行研究でほとんど論じられなかったものとして、英文の『成吉思汗』『支那古文学略史』『希臘古代理学一斑』『周易起源』『日本文章論』などの著作、「支那史体ヲ難ス」「東洋書籍編纂法」などの文章がある。本稿では、末松の英国留学中の事蹟やこれらの著述を踏まえ、留学中の末松の活動に見られる近代的な漢学へのアプローチについて考察する。